

東アジア盤上遊戯史研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 康二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19711

2016年度 文学研究科

博士学位請求論文（要旨）

東アジア盤上遊戯史研究

学位請求者

清水 康二

1. 本研究の問題意識と目的

本研究で主として取り上げる将棋類、六博、囲碁、雙六類は考古資料が比較的多く残っており、考古学的な手法を用いて検討が可能である。東アジアを対象とし、一部では東南アジアの盤上遊戯を検討する。年代的には古代を中心とする。本研究の目的は研究対象とする盤上遊戯に関する下記7項目を中心とした考察を行うことである。

- ① 各盤上遊戯の成立年代あるいは伝来年代を明らかにすること。
- ② 各盤上遊戯の伝来経路を明らかにすること。
- ③ 各盤上遊戯の形態変化を明らかにすること。
- ④ 各盤上遊戯の遊戯者階層を明らかにすること。
- ⑤ 各盤上遊戯の成立や改変の原因を明らかにすること。
- ⑥ 各盤上遊戯と宗教、呪術的使用の関係を明らかにすること。
- ⑦ 各盤上遊戯に広域に伝播するものと比較的狭い範囲で遊ばれるものがあるが、その違いを明らかにすること。

2. 本研究の構成ならびに各章の要約

・ I 章

東アジアの盤上遊戯を概観し、本研究の研究対象と研究目的を述べた。

・ II 章

将棋研究史上の諸問題を整理し、考察した。

1 節：興福寺駒が将棋史研究に与えた影響を述べた。

主に伝来年代論争を通じて伝来年代問題が解決しない理由を探った。

2 節：伝来年代問題が解決しない原因と将棋の初期遊戯者を東南アジア伝来説の研究史をもとに検討した。1970年代に将棋の東南アジア伝来説が提唱された。これに追随者が生まれ、東南アジア伝来説が広まった。同時に増川宏一の著作において、「庶民の遊戯である将棋」というドグマが設定されたことが原因であったと指摘した。将棋の伝来者と初期遊戯者が「庶民」であるという想定が東南アジア伝来説と関連し、将棋史研究の前提となったことが、未だに伝来年代問題が解決できない理由とした。

3 節：将棋の「公権力創造改変説」の1例を検討した。「公権力創造改変説」とは皇帝や王などの公権力が盤上遊戯を創造することや改変を指示するものとした。日本の将棋は中国から伝わったものではなく、平安時代的一条院の宮廷で唐代の怪奇小説「岑順」をもとに創作されたという説がある。検討の結果は一条院の宮廷で将棋が創作されたという証拠はない。将棋の創作と改変と公権力の間に関係はみられない。

・ III 章

日本の平安時代の将棋、中国の宋代の象棋駒、韓半島のチャンギ、タイのマックルックについて考古学資料を中心に考察した。

1 節：平安時代の将棋駒出土遺跡と出土駒を検討した。出土遺跡は寺院、宮殿、官衙など当時の富裕層あるいは知識層に関わる遺跡である。したがって、将棋の初期遊戯者は「庶民」ではなく文字駒を使用する事からしても

富裕層であることが遺跡の出土状況からも確認することができた。

2 節：北宋末～南宋初頭とされる青銅製象棋駒を中心に考察を加えた。青銅製象棋駒には鑄造後の人為的な穿孔が見られるものがあって、紐でつり下げたものではないかと推測した。窖藏や塔の地宮に埋納されているものがあり、「岑順」の物語に副葬された象棋駒が墓を侵すものに靈力を発揮するくだりがあることから、このような青銅製象棋駒には辟邪目的に埋納されたものがあると推定した。

3 節：チャンギを検討した。韓半島のチャンギ資料や中国の象棋資料の検討から、韓半島への象棋の伝播は 12 世紀前半から 13 世紀中葉の頃と想定される。

4 節：東南アジア伝来説の根拠であるタイのマックルックと将棋の類似に関して検討した。類似点は「歩兵相当駒の 3 段目配置」、「銀将相当駒の動きが同じ」、「歩兵相当駒の成駒反転」である。前 2 者については根拠にはならないことを示し、最後の「歩兵相当駒の成駒反転」についてもタイ北部の 15-16 世紀の駒の調査によれば「歩兵相当駒」候補の形態が反転可能なものではない。したがって、マックルックの成駒反転が将棋の成駒反転に影響を与えたとは考えにくい。

・IV章

将棋類が日本へ伝播した年代の特定と伝来者、初期遊戯者や日本化の問題について論じた。

1 節：東アジアへの将棋類の伝播年代と系譜を論じた。中国では 9 世紀の考古資料は発見されていないが 9 世紀前半の「岑順」の物語に象棋が明確に記されているため、この時期には象棋が流行していたことがわかる。伝来時期は早くても 8 世紀後半と想定した。日本列島へは 11 世紀後半の興福寺駒と 11 世紀中頃の『新猿楽記』があることから 10 世紀後半～11 世紀前半に「古式象棋 C」が中国から伝来したと考えた。将棋の伝来は、東南アジア経由と想定せずに、インドから中国へ伝わった将棋類が日本に伝来したと考えた。

2 節：将棋の日本化の過程を探った。将棋駒の名称には仏教思想にかかわるものが見受けられる。「玉」「金」「銀」「桂」「香」の美称も五宝や七宝の概念と共に仏舎利納入時の入れ子状容器や釈迦入滅時の四重棺の仏伝に由来すると考えた。興福寺出土の習書木簡の「酔像」の駒名も「酔象調伏」の仏伝にも関係するが、入宋僧裔然が将来した釈迦瑞像から取られたものと想定した。したがって、将棋類の日本化の課程には僧侶が深く関わった

と考えた。伝来者も入宋僧であろう。

・V章

六博と雙六類、囲碁の変遷と伝播を中心に検討した。六博類に含まれると判断した樗蒲とかりうち、ユンノリにも触れている。

1 節：戦国時代中期～後漢代まで考古資料を確認できる六博を扱った。博局の形態が多様なため、型式分類を行い編年と分布を検討した。各型式の六博は長く重複して遊ばれた様子が確認でき、地域性を持っている型式も存在することがわかった。

2 節：鏡の方格規矩文が「天円地方」の宇宙観との関係で論じられることがあるため、六博の型式編年をもとに両者の関連を検討した。博局は方形であるし、典型的な方格規矩文は最古段階の六博には現れないため、仮に「天円地方」と関係があったとしても方格規矩文へ後に付与されたものである。方格規矩文が描かれることのある蟠螭文鏡や草葉文鏡には崑崙山のような神聖な山岳を表したとされる文様がある。六博は崑崙山に住むとされる西王母信仰との関連が指摘されている。両鏡式は方格規矩文が採用されるにふさわしい鏡であると指摘した。

3 節：六博の後継盤上遊戯が樗蒲、かりうち、ユンノリであると想定した。今後はこれらをまとめて、「六博類」とすることを提唱した。

4 節：雙六類の伝来経路を検討した。雙六の東アジアへの伝来年代は北魏頃とされている。正倉院の雙六盤に北方系と南方系があるという指摘があり、南方系は雙六類の東南アジア伝来説の根拠となっている。現在のタイには北方系の雙六盤があること、古代の中央アジアには南方系の特徴である方形柁目の雙六類があること、ポロブドールの遊戯盤を含むインド系の遊戯盤を正倉院の南方系雙六の先行型式とすることはできないことから、雙六類の東南アジア伝来説の根拠は薄弱であることを示した。正倉院の木画紫檀雙六局と紫檀木画雙六局は韓半島製、木画螺鈿雙六局と榿雙六局は国産と想定した。

5 節：囲碁の変遷と伝播を考察した。前漢前半には囲碁の存在を確認でき、4 星 17 路から 5 星 17 路、5 星 19 路へ中国大陸で変化したと想定した。韓半島北部へは漢四郡の設置の時に伝えられたと考える。韓半島南部へは 5 世紀頃に南朝から 5 星 17 路盤あるいは 5 星 19 路盤、あるいはその両方が伝えられたと思われる。その後、9 星 19 路盤が韓半島で作られ、さらに 17 星 19 路盤に改変されたと考えた。日本列島へは韓半島から 9 星 19 路盤が 7 世紀頃に伝えられたと想定した。正倉院の 17 星

19 路盤（木面紫檀碁局）は韓半島製で、2 面の 9 星 19 路盤（桑木木面碁局）は韓半島製あるいは国産と考えた。

チベットへは吐蕃の建国後 7 世紀頃に 5 星 17 路盤が中国から伝えられたと考えた。その後、13 星 17 路盤に改変されたと想定した。

・VI章

I 章で設定した本研究の目的について、各盤上遊戯の検討結果を比較した。

- ① 盤上遊戯の成立年代や伝来年代については前述したとおりである。
- ② 伝来経路に関しては将棋類、雙六類の東南アジア伝来説は根拠が薄弱であることを示した。
- ③ 盤上遊戯の形態変化については六博、囲碁でその変化を型式学的に示し、六博の後継盤上遊戯についても推測した。
- ④ 遊戯者層の問題は高度な知能ゲームであるほど富裕層や知識階級であることが想定できる。当然のことながら伝来者や初期遊戯者も同様である。六博のように当初は富裕層が遊戯者であってもユンノリのように簡単な盤上遊戯になることで遊戯層が広がると考えた。
- ⑤ 盤上遊戯の改変に公権力が介在した様子は確認できなかった。盤上遊戯は遊ばれていく過程で自然に変化

するものが多い。ただし、将棋類の場合は仏教思想などと結びついて改変や大型化を遂げる例があった。

- ⑥ 宗教的、呪的使用法に関しては、東アジア最古の盤上遊戯である六博に濃厚にあらわれている。象棋なども駒の名称が戦争の役割分担を示すこともあって、呪的な使用法が見られ、怪奇小説も生み出されていた。それに対して囲碁や雙六は純粋に盤上遊戯として楽しまれた傾向が強いと判断した。
- ⑦ 広い地域に伝播する盤上遊戯と狭い範囲にしか広がらない盤上遊戯の差は、盤上遊戯が遊ばれた時期の交易経路の発展程度にも影響される。また、受け入れ側社会の発展程度の問題も大きい。宗教的な性格の強い六博は広く伝わることはなく、後継盤上遊戯になり宗教的な性格が薄まって簡便化すると広く伝わると思った。囲碁はかなり早い段階から高度なルールと遊戯者の計算能力が求められた。漢人が多く移動するか受け入れ側の社会が高度に発展していない限り伝播しにくい盤上遊戯である。それに対して将棋は初期の段階は興趣の高い盤上遊戯ではなかったことから、広く伝播し、各地で改変を受けたものと判断した。雙六類も広く伝わったが、これも単純明快な形態とルールが宗教と宗教性が薄いこともあって広く伝播したと判断した。